

在宅医療ワークショップのエスノメソドロジー 在宅医療における専門家と素人

中井 知美(B 班)
山木 ありさ(B 班)
宅和 真弓(B 班)

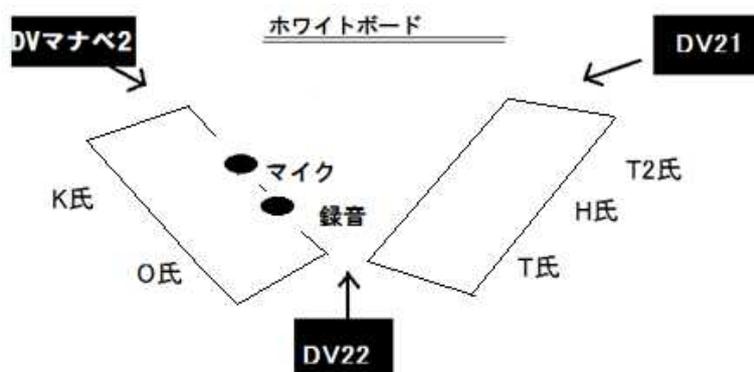


図 1 ワークショップの席順と各 AV 機器の配置

(1) 自己紹介の場面

断片 1: ワークショップの開始場面

【DV22Vol.1 00:09(2: 14:00pm)】





【断片 1：トランスクリプト】

- 01 T:あ：僕はこの：B 班の班長をやらせて：：もらっている：え：：：(2)T といいますよろしくをお願いします。(.)((T 頭下げる))
- 02 T:3 年生ですお願いします：：：す
- 03 ((5 秒の沈黙))
- 04 ((T が下を向く))
- 05 ((ペンを持つ))
- 07 ((H が T に視線を向ける))
- 08 ((H が T に頷き、T も H に頷き返す))
- 09 H:え：：と(.)
- 10 H:社会創生学科の 3 年生の H と申します書記:やらせていただきますよろしくお願ひします
- 11 T2:人間文化学科 2 回生の T2 といいますえ：板書を担当しますよろしくお願ひします
- 12 ((5 秒の沈黙の開始))((O 氏は下を向いて手元で何か作業している)) (2:14:35PM)
- 13 ((K 氏が O 氏を見る))
- 14 ((K 氏が視線を落とす))((同時に H 氏と T2 氏が O 氏を見る))
- 15 ((H 氏が一瞬 T 氏を見る))((同時に K 氏が再び O 氏を見る))((O 氏が顔を上げる))
- 16 O:あっ(1) (2:14:40PM)
- 17 ((H 氏大きく頷く))
- 18 はい私は(.)
- 19 ((T 氏顔を上げて O 氏を見る))
- 20 徳島大学に：

21 ((T 氏大きく 2 回頷く))

22 一年前去年の 4 月から入学して(.)大学院生の博士課程の今(.)2 年生です O と申します(2)
よろしくお願いいたします

23 K:っはもうさっき紹介していただい() K ですよろしくお願ひします

ここはワークショップを始めようとそれぞれ自己紹介を行う場面である。最初に T 氏が自分の自己紹介を終えた後、視線を自分の手元に移し次の発話者の指定をしなかったために無言の時間が発生し、T 氏の隣に座る H 氏が T 氏に視線を向け、T 氏が H 氏に視線を合わせたときに両者は無言で頷きを交わし、ようやく H 氏の自己紹介となる。

次の発話者の指定がされず無言となってしまった場面で、席順として・学生として順当にいけば次の発話者になるであろう H 氏が、先行発話者かつ司会であるために次の発話者の決定権を持つ T 氏に視線を向け、様子をうかがっていること、そして、H 氏と T 氏の間で「発話しても良いか」「どうぞ」のような無言のやりとり(打診と回答)がなされたことが H 氏の発話の前の両者の「頷き」から読み取れる。こうしたところから、この場面では「会話の順番取りシステム」が見られるのではないかと考えられる。

この場面で見られる会話の順番取りシステムでは、1 人目(最初の発話者)の自己紹介の仕方が慣例となって 2 人目以降の人々の自己紹介の形式が決まるという要素が見られる。また、T 氏と H 氏の自己紹介の順番交代が円滑に行われなかった理由の 1 つに、【断片 1: トランスクリプト】の 01 行目で T が「あ: 僕はこの: B 班の班長をやらせて: : もらっている: え: : : (2) T といいますよろしくお願ひします(.)」と言って頭を下げるという発話の終わりを見せながら、その直後に 02 行目で「3 年生ですお願ひしま: : : す」と付け足しの発話を行っていることから、T 氏の自己紹介の終了がどこであるか H 氏が判断しかねたという理由があるのではないか。

その他の要因として、この場面が『ワークショップ』という各人が意見を活発に出し合って議論を行い、グループとしての意見を建設的に打ち立てていくべき場であるということが作用しているとも考えることも可能である。T 氏は次の発話者を決定する権利を持つが、ここが『ワークショップ』という自主性を尊重すべき場面であるがゆえに、敢えて H 氏を指名せず、H 氏の発話を H 氏自身の自主性に委ねようとしたのではないか。ワークショップという場面で望ましいのは指名されずとも各自が自らの意見を積極的に言える状況である。T 氏はこの場面に参加しているのはそうした認識をきちんと持った自主性のある人々であり、だからこそ指名せずとも会話の交代が円滑に行われるということを強調しようとしたのではないだろうか。

ちなみに、T 氏の自己紹介から H 氏の自己紹介までの「5 秒間の沈黙」というこのトラブルはトランスクリプト 03 行目の H 氏の「え: : と(.)」の発話で解決していることが分かる。ここにおいて、H 氏の「え: : と(.)」は「今話すことはないけれど、私が発話権を持っている」ということ的主張であると考えられ、無事 T 氏から H 氏へ発話権の移行が完了したと捉えて良いだろう。

沈黙の時間の発生というトラブルは自己紹介の場面でもう一度見られる。トランスクリプトの 11 行目で行われた T2 氏の自己紹介終了後から O 氏の自己紹介が開始する 16 行目までに、このグループは再び 5 秒間の沈黙の場面を迎える。この 5 秒間は全員が無言であるものの、参加者たちは休み無く活発に視線を行き交わしている。以下の写真は T2 氏の自己紹介終了後から O 氏の自己紹介が始まるまでの間に観察された参加者の視線の投げかけを示した写真である。





T2氏が淀み無く「よろしくお願ひします」と発話の終了のシグナルを示しているにも関わらず、この5秒間の沈黙が発生したのは何故なのか。まず、T2氏は席順から考えてO氏とK氏どちらにも発話を移行させることが可能である。しかし、次の発話者がO氏とされたのは、このワークショップの前に行われた講演で既にK氏は紹介を済ませており、この場面で改めて自己紹介をする必要性が低いことが要因として考えられる。これは、トランスクリプト23行目で行われるK氏の自己紹介が非常に簡易なものであることから伺い知ることができる。また、K氏自身がまだ自己紹介を行っていないO氏の紹介が優先されるべきであり、O氏に比べると自らの自己紹介の必要性は低いと考えていることもT2氏の自己紹介後、K氏が一番最初にO氏に視線を送っている(トランスクリプト13行目)ことから分かるだろう。この「自己紹介をしていない=未知の人から自己紹介を行うべきだ」という認識はH氏とT2氏にも共通しているようで、K氏がO氏から視線を外した直後に、今度はH氏とT2氏がO氏に視線を投げかけるようになっている。その後、手元で何か作業をしていたO氏が発話の移行が行われていない不自然な5秒間の沈黙とH氏、K氏、T2氏の3人からの視線に気づき、自己紹介を始めるに至る。

この間の参加者の動向を分析すると、H氏に関してはトランスクリプト16行目(2:14:40PM)にO氏が小さく「あっ」と言い、「はい私はー」と自己紹介を始める瞬間に大きく頷いているのがはっきりと確認できる。H氏はその直前に自分の手元に視線を落とし続けるT氏の様子を一瞬うかがっており、T氏が発話者の決定権を持っていることを強く意識しているのだと考えられる。また、司会であることから発話者の決定権を持つT氏は沈黙の間自らの手元に視線を落とし続けているが、何か作業をしていることからこのワークショップ全体の進行を確認している可能性があり、自分の与えられた役割を意識していないわけではないだろうということが推測される。

(2) K氏からO氏への発話権の移行場面

断片2: 専門家としてのK氏の表明

【DV22Vol.3 03:07(2: 29:56pm)】



01 K:病院の方に()しまったという面もあるので(.)だから

02 K:n : :ま : 解消するべき

03 ((O氏を見る))

04 なのかどうかというのはちょっと(.)

05 ((T2氏が板書しようとして一瞬立ち上がるがまた席に着く))

06 私はその場でその場で(.)こう(.)

07 K:臨機応変にする(.)方が(.)

08 ((O氏を見る))

09 ((T2氏が立ち上がって板書))

10 いいのかなあと思います(0.2)

11 ((O氏を一瞬見る))

12 ((一回生徒側を見るがすぐまたO氏へ視線を向ける))

13 ど(.)どう思われますか

14 ((右手をO氏の方へ向けながら覗き込むようにO氏を見る))

15 ((O氏深く頷いて大きく息を吸う)) 発話しかけている

16 K:なんか自分ですごく自分の経験としてたくさん(.)

17 ((O氏を見る))

18 ((O氏大きく深く一回頷く))

19 そうというのが

20 K:ぱぱぱっとみとりのこともあったし

- 21 ((O 氏大きく頷く))
- 22 りょう-長期療養
- 23 ((O 氏大きく頷く))
- 24 のひひ
- 25 ((O 氏大きく頷く))
- 26 未だに(.)元気で(.)
- 27 ((一瞬 O 氏を見る))
- 28 K:おじいちゃんは(.)
- 29 ((O 氏大きく頷く))
- 30 ってますからね
- 31 ((O 氏大きく頷く))

これはK氏の個人の体験に基づく「看取りをするのは在宅療養とはまた違って来るから、臨機応変にしていくべきでは」という趣旨の長めの話をしている場面である。話の終了に近づくにつれてK氏はO氏のほうを頻繁に見るようになる。そして実際に話がひと段落した際にはO氏に「どう思われますか」と話を振っている。(ただし、その後もK氏が話を続けている。その代わりに、O氏が頷く大きさ・回数が大きく・多くなったように思われる。)ここでも断片1で見られたような会話の順番取りシステムが確認されるのではないかと考えられる。K氏は自分の次に発話する人をO氏と考えていることを示すためにも、会話が終了に近づくにつれてO氏に頻繁に視線を送るようになり、また「どう思われますか」とO氏に発話権の譲渡を行った後にK氏は自分が再び話を続けるが、それから後のO氏の頷きの大きさ・回数が大きく・多くなったのは次に発話することができるのが自分であるとO氏が確信を持ったからではないだろうか。

また、K氏の話し方に注目してこの場面を分析すると、K氏の「なんか自分ですごく自分の経験として」という発言から、あくまでも現在語っている内容が自分の経験に基づく限定的な意見である点を強調していることが分かる。K氏からO氏への頻繁な視線の投げかけからも、他の専門家へ発話する際に非常に慎重になっている様子が伺える。K氏は「己の未熟さは十分承知しておりこれはあくまで個人的な意見であるため、他の専門家からのあらゆる意見も受け入れるつもりである」という姿勢を専門家であるがゆえに保っているのだと考えられる。こうした意思の表明はO氏に発話権を譲るところからも見てとれるのではなからうか。つまり、K氏のこうした姿勢は一見自信のなさそうな態度に見えるが、これこそが自分は専門家であるという自負の表れだといえるのである。

それに対し、O氏には発話中同じ専門家であるK氏の様子を伺う素振りが見られず、素人であるT氏に対し切々と自信を持って話しかけている様子が伺える。つまり、同じ専門家であっても、そのふるまいには話す相手が専門家か素人かによって異なる現れ方をして

いるのだと考えることができる。しかしその実、このまったく異なる振る舞いに見える 2 つの態度は本質的には同じものが状況によって変化して現れているのである。

(3) O氏の発話の際に特に頷き・相槌・視線を合わせるといった反応が大きくなるT氏

断片3:話し続けるO氏の場面

【DV22Vol.4 00:54(2:34:28pm)】



- 01 O:それが土曜日日曜日ボランティアで家庭訪問しててで
02 O:あの：高校生にお母さんの髪の洗い方とかあの教えてあげて
03 O:そして
04 ((T氏書き物を終えて顔を上げる))
05 あの病院に入院した時にも(.)
06 ((T氏ここからずっとO氏の話に頷き続ける))
07 お部屋を：婦長さんに交渉して
08 O:あの：個室に入れてもらって家族が泊まれるように(.)
09 ((T2氏頷く))
10 段取りつけてで
11 O:最後は家族(.)が(.)病院に入院して十日ぐらいで亡くなっちゃったんですけど
12 ((K氏2回頷く))
13 O:だからそういったこと考えるとさっきの意見ですけども
14 O:だからケースバイケースかなと[思いますね
15 T: [なるほどなるほど(.)なるほど
16 ((T氏前かがみだった体勢を後ろに反って変え、視線を手元の紙へ移す))
(略：この間もO氏の話は続く)

【DV22Vol.4 02:32(02:36:08PM)】

- 17 O:でも家族が(受け止め)きれないときってというのは:
18 T:はいなるほどほんとに[介護力がちょっと不足して:
19 O: [ほんとに そうそうそう
20 O:それと周囲のね
21 T:なるほど
22 O:サポートとか
23 T:サポートがちょっと
24 O:いなくて
25 T:はい
26 O:サポート体制
27 T:はい
28 O:町と
29 T:はい
30 O:田舎はねあの:システムが違うそれと(2)
31 T:はい
32 O:介護保険法ができて
33 T:はい
34 O:介護保険法と違う枠組みで(プラスサイトファー)のシステムがあるんだけど町の方
ではねそれが大きい市町村あるけれども
35 T:はい
36 O:小さい(2)ところでは
37 ((T2 がホワイトボードを見る))
38 制度がない[場合もあるから
39 T: [なるほどなるほど
40 O:さっき K 先生がおっしゃったように
41 ((T2 が板書のために立ち上がる))
42 介護力 (.)も不足してるとそういっためんだい-問題がたくさんあるかなあと
思います
ね
43 T:都会と田舎で
44 O:そう
45 T:それぞれで考えていかないと
46 O:[そう
47 T:[そういうことですかわかりましたありがとうございます
48 ((板書している T2 氏に視線を向けて一瞬確認する))
49 O:私福岡でしてるときはすごくね(.)あちこちと連携とって

- 50 T:はい
- 51 O:してたりして千葉県松戸でやってた訪問看護
- 52 T:はい
- 53 O:の他に訪問歯科診療それもやってたんです
- 54 T:はあはあはあはあ(.)たくさんやられて
- 55 O:歯医者さんとか一緒に連れて訪問行ったり
- 56 T:なるほど
- 57 ((T2 が板書を終えて着席する))
- 58 O:それは昭和の時代ですけどね だから地域差がすごく大きい感じてます
- 59 T:はい
- 60 O:実際にうちの母だったらあの入院したんですけど2 4時間(.)付き添いがいったんですよ
- 61 T:ふんふんふんふん



○氏の発話において一番大きく反応を示しているのはT氏である。T氏はK氏の発話の際にも他の学生メンバーと同じように反応を示していたが、○氏の発話では他のメンバーに比べても一際大きく反応を示していることが分かる。○氏の発話中にはT氏の顔がずっと見られるが、対してほかのメンバーは所々で顔を出しているが相槌などは無く、視線も○氏に常に向けられているというわけではない。また、T氏は筆記を行う際にもK氏の発話のときより顔を上げる頻度が多いようにも感じられる。こうした理由には、T氏が○氏の一番近くに座っていること、○氏の声がK氏に比べて小さいこと、○氏の話が多少脇道へ逸れがちであること、などが原因となっているかと考えられる。以上の点に関連して、“○氏がT氏に語りかけている”ように、“T氏自身が感じている”可能性がある。

特に、「○氏の話の内容が多少脇道へ逸れがちである」ことが大きな要因となり、司会のT氏が○氏の話をごまめにまとめ直し、書記のT2氏がそれを聞いて板書を行うという風に、T氏とT2氏が協働して○氏の発話の内容をまとめようとする動き（定式化）が確認された。トランスクリプト37行目では既にT2氏は○氏の話が途中であるにも関わらず話し合いの内容をまとめるホワイトボードを確認するようになり、41行目では席を立てて板書を始める。また、板書の書き終わりについても○氏の話の終了とは無関係に行われており、T2氏は定式化を行いながら板書していることが分かる。

また、○氏の話に常に反応を示しているT氏に関しても、トランスクリプト17行目から18行目（「○:でも家族が(受け止め)きれないときっていうのは:」「T:はいなるほどほんとに[介護力がちょっと不足して:]」)に見られるように○氏の話の先をまとめようという発話の確認され、積極的に定式化を行っているということが出来る。

以上の観点から考えると、T氏の顔は「同意という理解の提示」という単純な相槌ではなく、次の話への「内容の催促」「話の終了の催促」の意味を持つものであると考えられる。これは、先述した○氏の話の先を先読みしてまとめようとする点や47行目で「T:[そういうことですかわかりましたありがとうございます]」と○氏の話に終了のシグナルを示した点からも見て取ることが可能である。